世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

中年期におけるアイデンティティ再体制化とジェネラティヴィティの関連性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-07-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 賢二 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1259

中年期におけるアイデンティティ再体制化とジェネラティヴィティの関連性

中　山　賢　二

1. 問題と背景

1. 1　中年期の危機と転機

Jung（1948 鎌田訳 1979）は、人間のライフサイクルを一日の太陽の運行になぞり、中年期の始まりである正午に下降を始めると、午前に蓄えた自己が崩壊し、矛盾に陥ると述べた。そして、中年期を人生最大の危機の時期と位置づけ「重いノイローゼの多くがあらわれてくるのは少しも不思議ではない（Jung，1948 高橋訳 1980）」と指摘した。同じように、Levinson（1980 南訳 1980）は人生を四季に重ね合わせて、中年期を「人生半ばの過渡期」と表現した。米国に住む中年期男性の調査対象者のうち、80％の者が幾多の挫折や葛藤を繰り返していたという。はたして、近年の日本人の中年期は、Jung や Levinson が述べたように危機的な時期なのだろうか。

鑪・岡本・宮下（2002）は、成人期以降のアイデンティティに関する研究レビューにおいて、中年期の危機の存在を説明した代表的な国内の事例を５つ紹介している。また、松尾・渡辺（2007）は、中年期の職業人を対象とした調査結果から、中年期になると、自らの限界感から心理的な不安感を介して精神的な不健康にいたることを示唆している。とりわけ、近年の激しい社会環境の変化および経済的な問題が、中年期の心理的危機感を高めており、それが自殺のきっかけとなっているのではないかと指摘している。

厚生労働省が定期的に実施する実態調査の「年齢階級別自殺死亡率の年次推移」からは、過去 10 年間の自殺者数は微妙に減少しているものの、自殺者数の多い年代は上位から、50 代、40 代、60 代、70 代と中高年期が占めている（厚生労働省，2019）。そしてこの傾向は 10 年間あまり変わっていない。また、重度の場合、中年期には自殺のきっかけになるといわれる気分障害（高橋，2000）が診断された年齢層は、35 歳から 65 歳の年齢層が他の層と比べて最も多い（厚生労働省，2019）。この数は、15 歳から 34 歳の層と比較して 3.8 倍である。このように、先行研究が示した中年期のアイデンティティ危機の存在と、中年期に自殺者や気分障害が多い実態に鑑みると、近年の日本においても中年期は心理社会的な危機を経験する時期といえよう。

それでは、中年期は危機的契機をもたらすだけの時期なのだろうか。小此木（1983）によれば、このころに体験するさまざまな出来事がきっかけとなって、今までの抑圧や意識から解放されると、内的に別の可能性が見えるのだという。室松（2015）は、キャリア・ヒストリーの分析結果から、40 歳前後の女性は、危機を乗り越えるだけではなく、人生の正午が転機となって、危機の経験をその後の仕事のやり方に活かしキャリア好転に結びつけていたと説明している。また、笠井（2008）は、ライフストーリー調査から、中年期企業人が飲み込まれてしまう物語を危

機として語っている一方で、「それは“危”だけにとどまらず、別の物語が芽生え育ち、新たな物語の創造へつながる“機”となりえる物語」と述べている。中年期には家族や周囲の人との役割や関係が変化するとともに、活動の原動力が、個人の能力の発揮から生きていく意味の探求へと変化するとともに（宮城，2015）、深い精神活動に刺激されて、本当の自分というものが得られるのである（Bridges，2014 倉光・小林訳 2014）。ライフサイクルのなかでも、とりわけキャリア発達の節目に人生を好転させる機会は「一皮をむける経験」と表現される（金井，2003）。

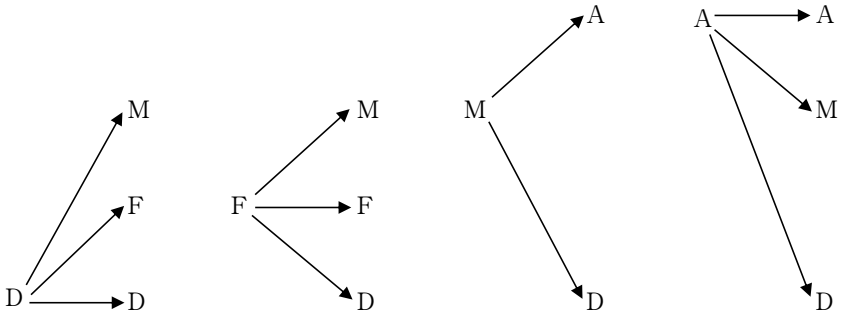
このように、中年期は心理的な危機をもたらす時期でありながら、人生を好転させる可能性のある重要な転換期ともいえよう。

1. 2　中年期のアイデンティティ

Erikson（1980 西・中島訳 2015）によれば、子どもの頃から依拠してきた斉一性と連続性が青年期に問い返され、心理的危機を経験する。そして、青年期の終わりには、アイデンティティの同一化が完了し安定する。それでは、アイデンティティは、どのような状態が存在し、同一化したものは、成人期以降に変容するのであろうか。

Marcia（1966）は、青年期のアイデンティティを理解するためにアイデンティティ・ステイタスを開発した。人生における職業、宗教、政治の３つのテーマに対する、危機（crisis）と関与（commitment）の経験の有無から、アイデンティティ同一化の程度を４つの状態（アイデンティティ拡散、早期完了、モラトリアム、アイデンティティ達成）で評定するものである。Waterman（1982）は、青年期が対象であったこの理論を成人期まで拡大させて、その変化をモデル化した（図 1）。そして、青年期に獲得したアイデンティティは必ずしも固定したものではなく、心理社会的な影響を受けて変化するものであり、「アイデンティティ・ステイタスはプロセスである」と説明した。さらに、必ずしも低次から高次に移行するだけではなく、「アイデンティティ達成」から「モラトリアム」へ陥るといった、高次から低次への退行も示唆した。

清水（2008）によれば、青年期に確立したアイデンティティは、中年期に際立った心理社会的な出来事を経験したときに揺れ動き変化する。その経験が重要なものだという内的な気づきに至ったかどうか、今が人生の転換期でもあるという肯定的な意識をもてるかどうかが、変化の方向に影響するという。岡本（1985）は、このような中年期にアイデンティティが崩壊あるいは動揺し、再び組みなおされて安定する過程を「アイデンティティ再体制化」と定義した。そして体制化に成功すれば、以前よりも精神的な健康とともに自己の安定感や肯定感を獲得すると述べている。このような再体制化が人生を好転させる機会と捉えると、中年期の危機は、まさに「一皮むけた経験」の表現に値するといえよう。



D: アイデンティティ拡散　　F: 早期完了　　M: モラトリアム　　A: アイデンティティ達成

※D→M（最左図）は「アイデンティティ拡散」から「モラトリアム」へのステイタス上昇を、A→D（最右図）は「アイデンティティ達成」から「アイデンティティ拡散」への下降を表現

図１　アイデンティティ・ステイタスの発達モデル（Waterman，1982 より作成）

1. 3　中年期の発達課題　ジェネラティヴィティ

Erikson（1980 西・中島訳 2015）は、ライフサイクルを８つの心理社会的発達段階にわけて、中年期にあたる第７期に経験する危機を「ジェネラティヴィティ（generativity）対 停滞（stagnation）」とした。当初の Erikson（1950 仁科訳 1977）は、「親であること」を第一義的に定義したが、その後第６期の発達課題「親密性」から生み出される次の世代との相互作用、自己探求、創造性など、さらなる多義的な要素を加え、８番目の課題「統合」との関連も繰り入れた（Erikson，1980 西・中島訳 2015）。最終的には、自らが創造してきたことへの自己の問い直しと、未来と社会全般への関係性に深く関心をもって探求すること、それらの両者が相互作用して自己へ統合していくことを、ジェネラティヴィティとすえ置いたのである（Erikson E.H.，& Erikson J.M.，1997 村瀬・近藤訳 2001）。

それでは、中年期におけるアイデンティティは、ジェネラティヴィティの高まりに関連性があるのだろうか。佐方・中西（1987）によれば、成人期以降、とりわけ 40 代前半にはアイデンティティの再体制化が迫られる転換期があると同時に、年齢を増すごとにジェネラティヴィティが高まっていた。中西（1989）はこの研究に鑑みて、ジェネラティヴィティの充実感および達成感が、中年期以降のアイデンティティ危機を乗り切る原動力になると述べている。また、Marcia（2002）も、次の世代を世話する親や指導者などを例に挙げ、ジェネラティヴィティ達成者としてのアイデンティティ（one's identity as a generative person）という概念を提示している。この概念においては、中年期に再びアイデンティティの発達が喚起されたことを機会として、いかに自己投入の対象をジェネラティヴィティへと変化させられるか、つまり、アイデンティティ再体制化（reformulations）に対するジェネラティヴィティの重要性を述べている。

これまでみてきたように、中年期に体験する出来事が心理的な危機をもたらす一方で、ジェネラティヴィティを豊かにしていくことで、アイデンティティの再体制化を促し、危機が乗り越えられる。そして、一皮むけた自己を実感できれば、それ以降、安定的かつ肯定的に過ごすことができるのであろう。ところがジェネラティヴィティの発達に失敗すると、停滞感、自己陶酔感、

社会的な対人関係の窮乏化などがあいまって、心理社会的な危機をきたすのである（Erikson, 1980 西・中島訳 2015）。

岡本（2006）は、中年期を対象とした心理的援助に焦点をあてて、中年期の心の作業の課題を 3 点挙げている。第一には、中年期以降の成長への期待と喪失や衰退の体験という両極性に気づき折り合いをつけることである。第二には、人生の有限性や死を受け入れ、納得できる自己を再獲得することである。そして第三には、人生前半までの葛藤を解決することが最も重要な課題であると捉えている。とりわけ、成人期初期の心理社会的課題が未解決なまま中年期に突入していた場合には、問題は深刻であり、アイデンティティ危機における専門的介入が必要となる場合は少なくないと指摘している。一方、奥田・髙野（2018）は、中年期の危機を背景としたこれまでのジェネラティヴィティの臨床的研究には、「心理臨床的な問題の回復過程の中でのジェネラティヴィティの獲得プロセス」、「自己の有限性の意識化が問題となった場合のジェネラティヴィティをテーマにした援助」、「中年期の臨床的な課題におけるジェネラティヴィティ発達」の 3 つのいずれか、あるいは複数の視点が含まれていることを指摘している。そして、これらの視点が「なにより臨床実践における深いクライエントの理解と、適切な介入・ケアにつながる更なる知見が得られるもの（奥田・髙野，2018）」と捉えている。つまりジェネラティヴィティの研究成果が臨床実践に活かされることへの必要性を訴えている。

以上のような背景から、中年期の危機を乗り越えるとともに、その危機を人生の転機に変えることへの手掛かりを探るためには、アイデンティティの再体制化とジェネラティヴィティの発達の関連性を明らかにする必要がある。さらに危機に陥っているクライエントへの心理的・臨床的な支援を実践するためには、それらの関連性に併せて、ジェネラティヴィティを豊かにするための方法論が問題となろう。

2. 中年期におけるアイデンティティとジェネラティヴィティとの関連

2. 1　目　的

中年期のアイデンティティの再体制化を図る手立てを検討するにあたり、Erikson が中年期の重要な発達課題としたジェネラティヴィティに着目した。本研究では、国内外の先行研究から、ジェネラティヴィティを構成する要素とそのプロセスを示し、アイデンティティ再体制化との関連性を検討することを目的とする。また、アイデンティティ再体制化におけるジェネラティヴィティ研究の今後の課題と展望について考察するとともに、これらに関わる心理的・臨床的な課題と可能性について検討する。

2. 2　研究方法と研究対象

本研究では、文献研究を行った。研究のテーマに関連する文献の検索は、CiNii Article、J-STAGE のデータベースを用いた。「アイデンティティ」と「generativity」、「中年期」と「generativity」を AND 条件のキーワードとして検索し、「generativity」を「生殖性」「世代性」「世代継承性」にも変更し検索した。これらで抽出された文献は質的研究が中心であったことから、「generativity」と「narrative」および「語り」の AND 条件もキーワードに加えて検索を

行った。その結果は、表1のとおりである。

抽出された文献から重複するものを除外し、タイトルと要旨の内容をもとに研究目的に関連する文献を17件に絞った。それらの論文を全文精読し内容を検討した。この絞り込みと検討のプロセスから、ジェネラティヴィティの実証研究は、Kotre（1984）およびMcAdams D.P.（1985）が系譜となっていることが想定されたため、KotreとMcAdams D.P.の著者とGenerativityのキーワードをAND条件として、PsycINFOで検索を行った。抽出された文献からタイトルと要旨をもとに検討した結果、本研究目的に合致する文献は10件であった。以上の結果から、本研究の条件に一致する文献は、国内17件に海外10件を加えた27件であり、それらを本研究の対象とした。

表1　CiNii ArticleおよびJ-STAGEにおけるキーワード検索結果

	CiNii Article				J-STAGE			
キーワード（AND条件）	generati-vity	生殖性	世代性	世代継承性	generati-vity	生殖性	世代性	世代継承性
アイデンティティ	10	2	5	6	27	50	62	9
中年期	21	2	7	1	29	39	41	11
narrative	9	−	−	−	13	−	−	−
語り	16	−	−	−	22	−	−	−

※検索期間：Kotre（1984）の文献以降を検索対象とした

2. 3　結果・考察

2. 3. 1　アイデンティティ再体制化とそのプロセス

中年期のアイデンティティ

前章で述べてきたように、青年期に獲得したアイデンティティは、中年期に経験する出来事を機会に再び見直される。そこで、岡本（1985）は中年期成人を対象にした調査から、アイデンティティ・ステイタスが上昇していくプロセスを見出し、4段階で漸進していると説明した。まず、第一段階は、体力・意欲の衰えなどを契機に内的変化を認識する「危機の時期」であり、この気づきによって焦りや不安などを体験する。第二段階は、これまでの人生をふり返り、その意味を問い直す「模索期」であり、将来の方向性を定め直す。さらに、第三段階は、問い直しに答えを出す「軌道転換期」であり、最終段階は、軌道修正時に定め直した方向性にも馴染みはじめて、一応のアイデンティティの安定が得られた「再確定期」である。このように、中年期のアイデンティティは、4段階の過程を経て、より成熟、深化していく。そうすることで、中年期以降に直面するさまざまな危機にも、主体的に向き合う耐性が備えられるとともに、将来の人生に肯定的な道筋がつけられるという。

アイデンティティ再体制化に成功するのは、どのような人であり、どのような要因が影響しているのだろうか。岡本（1986）は、中年期の人を対象とした半構造化面接の分析から、中年期に遭遇した危機を主体的に受けとめ、危機を好転できる契機と理解して自分自身を問い直しできる人が、再体制化にもうまく成功し、より成熟したアイデンティティを獲得していたことを示唆し

た。さらに、「自我機能の高さ」、「危機に陥ったときの主体的模索」、および「成人期初期以前の心理・社会的課題の達成」の３つの要因が再体制化に影響することも指摘されている（岡本、1994）。また、Kroger & Green（1996）は、他者との関係だけではなく、仕事、宗教、政治、社会との関係における環境変化や危機的な経験を、どのように自己へ関連づけて内省するかが、中年期のアイデンティティ・ステイタス変化に大きく影響していると述べている。つまり、個としての発達課題であった青年期のアイデンティティが、中年期には他者などの対人的な関係性の影響を受けて、仕事や社会のイデオロギーにまで拡がった形で再びアイデンティティ危機を体験する。その課題をいかに内省して自己の人生へと再統合していくか、それを明らかにすることが、中年期の臨床的な支援に必要な基礎的知見になると考えられる。

アイデンティティ体制化とジェネラティヴィティとの関連

杉村（1998）は、心理社会的な課題のなかでも、とりわけ対人的な関係性に焦点をあて、自己と他者との関係のあり方そのものが、アイデンティティであると提起した。そして、中年期のアイデンティティの形成は、「自己の視点に気づき、他者の視点を内在化すると同時に、そこで生じる両者の食い違いを相互調整することによって解決していくプロセス」と述べた。同じように、永田・岡本（2005）は、再体制化に関連するもっとも基本的な単位は、重要な他者との関係であると考えた。そして、中年期を対象に、重要な他者との関係性から構築されるアイデンティティの様態と中西・佐方（1993）の心理社会的発達課題達成度（Erikson Psychosocial Stage Inventory: EPSI）との関係を調査した。その結果、重要な他者との関係の再構築完了の程度がEPSIの総得点に影響し、とりわけ、自己同一性（identity）、生殖性（generativity）、統合性（integrity）の３つの下位尺度を押上げていた。他者との関係変化の経験とその関係性の捉え方が、中年期のジェネラティヴィティの高まりとアイデンティティの統合に何らか影響を及ぼしていると考えられる。

ただし、永田・岡本（2005; 2008）は、ここでいう「関係性」を、基本的な単位とした重要な他者との関係からふたつの規準へと捉えなおしている。ひとつは、他者とのかかわりの「自己との主体的な位置づけ」であり、他方は、他者が特定の集団にとどまらず、そのかかわりがより広い社会へと展開する「コミットメントの普遍化」であるという。とりわけ後者は、Erikson（1980 西・中島訳 2015）のジェネラティヴィティの定義が、子孫だけではなく、より広範な他者への利他的な世話に積極的な関与をする発達課題であったことと一致する。このことから、積極的にジェネラティヴィティの課題に関与し行動することが、中年期のアイデンティティの再体制化に関係していると推察できる。

2. 3. 2　ジェネラティヴィティに着目したアイデンティティ研究

概念的なジェネラティヴィティからの再定義

アイデンティティの再体制化に関係すると考えられるジェネラティヴィティは、どのように構成されているのだろうか。Kotre（1984）は、概念的なジェネラティヴィティの再定義を試みた。そこで、根源的なジェネラティヴィティへの動機づけには、「主体的作用性（agentic form）」と「共同的関係性（communal forms）」のふたつの要素が存在するとした。そして主体的作用性は、

自己探求しそれを維持していく主体的な行動、共同的関係性は、他者や社会との相互関係を求めて親密にかかわる共同的な交流であると定義され、それぞれ4つのタイプに分類された（表2）。

表2　主体的作用性と共同的関係性における4タイプの例（Kotre, 1984より作成）

タイプ	主体的作用性の例	共同的関係性の例
1. 生物的	妊娠は男らしさ・女性らしさを証明するためにある	妊娠は子どもを世話し育てることを望んだ結果である
2. 親的	自分の理想像の型にはめて子どもを育てる	子どもが成長する姿を見守り支援する
3. 技術的	すべて自分のやり方でやらねば	正しいやり方で、そしてあなたができるように
4. 文化的	カルト指導者は信者の崇拝を惹きつける	良いリーダーはさまざまなことに対して、自分を犠牲にする

さらに、McAdams & Aubin（1992）は、Kotre（1984）の再定義と他の研究者たちの文献を整理しなおして、ジェネラティヴィティを構成する要素を概念化した。とりわけ構成要素のうち、ジェネラティヴィティへのかかわりに動機づけるものがふたつあるとした。ひとつは、何かを生成し次の世代に遺していく「文化的要請」、他方は、他者から自分が必要とされていると感じ沸き起こる「内的な希求」である。内的な希求には、Kotre（1984）のふたつの根源的な動機づけ要素、すなわち「主体的作用性」と「共同的関係性」が包含されると説明している。

アイデンティティ再体制化とジェネラティヴィティの動作機序

McAdams & Aubin（1992）は、ジェネラティヴィティを構成する要素とアイデンティティが統合されるまでの相互関係を模式化した（図2）。これによると、ジェネラティヴィティは、①文化的な要請（cultural demand）、②内的な希求（inner desire）、③次世代への関心（concern、以下関心）、④信念（belief）、⑤目標・判断に対するコミットメント（commitment、以下コミットメント）、⑥具体的な行動（action、以下行動）、⑦語り（narration）から構成され、これらを「動機づけ」「思考・計画」「行動・言動」および「意味づけ」の4つの相互作用のまとまりに表現された。

第一に「文化的要請」と「内的な希求」のいずれか、または両者が「関心」への動機づけの源泉となる。第二に、「関心」および「文化的要請」が人間の種を継承しつづけてきた「信念」を支えて「コミットメント」を思考する。そして第三に、「コミットメント」が次世代へ継承する「行動」へと導く。ただし「文化的要請」「内的な希求」が行動を直接動機づける場合もあるという。第四には、「動機づけ」から「行動・言動」に至るまでの過程を自伝的記憶として内省する。あるいは、もの語ることで、おぼろげなジェネラティヴィティ感覚が重要なものとして自己の物語へと意味づけられる。すなわち、これら第一から第四までの作用と語りを通してアイデンティティを統合していく。このようにして、McAdams & Aubin（1992）は、中年期の発達課題を概念的なものから、構成要素と語りとの関連を明らかにすることで、より整合性を与える理論モデルの提示を試みるとともに、アイデンティティを再構成していく具体的プロセスを説明したのである。

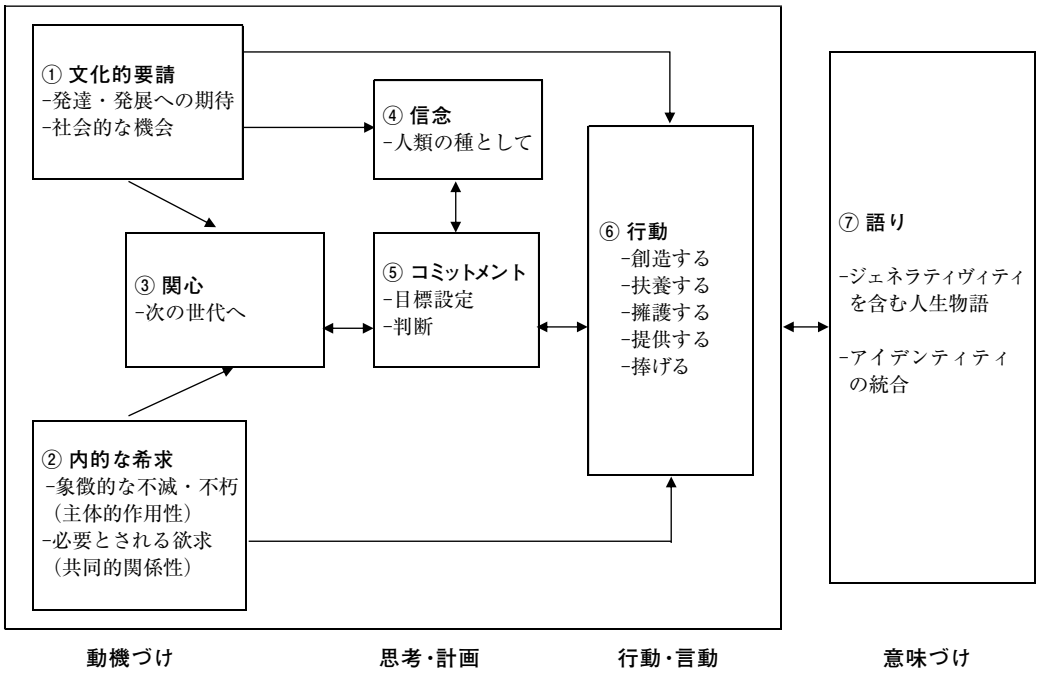


図 2　ジェネラティヴィティの構成図（McAdams & Aubin, 1992 より作成）

ジェネラティヴィティの尺度開発と実証研究

ある概念を科学の領域で扱うには、構成要素を定量化する尺度が必要になろう。McAdams & Aubin（1992）は、7 つの要素のうち、とりわけ、「関心」「行動」「語り」に着目して、それらを測定するための尺度を開発した。ひとつは、次世代への関心度を測定する Loyola Generativity Scale（以下 LGS）であり、20 の設問からジェネラティヴィティへの関心度を測る。もうひとつの Generative Behavior Checklist（以下 GBC）は、65 の項目（うち 16 はダミー設問）で構成され、世代継承への関心が行動に及んだかを測る尺度である。さらに、語りが関心と行動に関連しているかを検証するために、自伝的エピソードを問う 5 つの自由記述の質問が加えられた。自伝的エピソードの中にジェネラティヴィティにかかわる行為が含まれているかを得点化し、LGS と GBC との関連を検証するものである。McAdams & Aubin（1992）は、25 歳から 74 歳までの実験参加者にこれらの尺度を用いた調査をおこない、「関心」「行動」「語り」の 3 者が相互作用していること、とりわけ、「関心」と「語り」がもっとも関係が深いことを明らかにした。また、青年群、中年群、老年群のコホート調査にも適用して、「関心」「コミットメント」「行動」のスコアは、中年群がもっとも高い群であったと報告している（McAdams, Aubin, & Logan, 1993）。

国内においては、丸島（2005）が、この理論を検証するために、LGS と GBC を日本語に訳し、世代性関心尺度（Generative Concern Scale: 以下 GCS）と世代性行動尺度（GBC）を作成した。さらに、それらを日本の文化的背景に即したものへと変更するとともに、項目数を増やし、より

信頼性・妥当性の高い日本版 GCS と GBC を完成させた（丸島・有光，2007）。このとき、これらの尺度の妥当性を主張するとともに、「創造性」「世話」「世代継承性」の 3 つの側面が「関心」と「行動」に関連し、とりわけ「世話」と「世代継承性」の相関が高いことを明らかにした。これは McAdams & Aubin（1992）の見解とも一致していると考えられ、ジェネラティヴィティの構成要素においては、国や文化的背景による大きな差はないことが推察される。

McAdams らによるその後のジェネラティヴィティ研究

Mansfield & McAdams（1996）は、ジェネラティヴィティの高まりには、「主体的な行動」と「共同的な交流」が関係しているとした Kotre（1984）の基本的概念を検証するために、自伝的な記憶で語られるライフストーリーから「主体的な行動」および「共同的な交流」のテーマが出現する頻度を調査した。そして、現在のジェネラティヴィティの高さとの関係を併せて検討した。まず、教職者またはボランティア活動中の成人をジェネラティヴィティ高群、どちらでもない成人をジェネラティヴィティ低群とした。質問紙調査および半構造化面接を通して、対象者が人生を振り返った自伝的記憶から代表的なエピソードを抽出し分類した。それらのエピソードの中に、「自己統制」「地位・勝利」「達成・責任」「自己強化」のいずれかの要素が含まれていた場合には、「主体的な行動」に加点し、「愛情・友情、対話」「ケアとサポート」「コミュニティ」を含んだ社会的なかかわりの要素があった場合には、「共同的な交流」に加点した。そして、それぞれの合計点を導き出し、ジェネラティヴィティ高群と低群を比較した。その結果から、高群は「共同的な交流」の得点が明らかに高いが、「主体的な行動」の得点では群間差が小さいことが報告された。すなわち、自己へこだわる主体的な行動は、ジェネラティヴィティへの影響が小さく、その反面、家族や周囲の人びとへの愛情を大切にする、世話をする、あるいは地域コミュニティのケアにかかわる行動や関与は、ジェネラティヴィティの高まりに肯定的に影響することが示唆された。

精神的な健康リスクとジェネラティヴィティとの関連性

Jung（1948, 高橋訳 1980）が中年期を心理的な危機の時期と表現したように、ジェネラティヴィティの豊かさと中年期の精神的な健康面には関連があるのだろうか。

表 3　神経性傾向とジェネラティヴィティとの相関（Cox, et al. 2010 より一部抜粋）

	LGS	GBC	Composite
神経性傾向	−.29**	−.17	−.26**
不安症傾向	−.21*	−.12	−.19**
怒り・敵対心	−.18*	−.09	−.15
抑うつ性	−.25**	−.11	−.21*
自己意識	−.19*	−.19*	−.22*
衝動性	−.14	−.03	−.10
感情脆弱性	−.39***	−.26**	−.37***

*$p < .05$ **$p < .01$ ***$p < .001$

Cox, Wilt, Olson, & McAdams（2010）は、ビッグ5人格特性との関連性に着目して、28歳から74歳の成人を対象にNEO-PI-R（Revised NEO Personality Inventory）の神経症傾向（Neuroticism）とジェネラティヴィティとの関係を検討した。その結果、ジェネラティヴィティの高さは、神経性傾向に対して負の相関を示し、とりわけ、感情脆弱性（Vulnerability）および抑うつ性（Depression）のふたつの要素が、次世代への関心（LGS）に対して負の相関があることを明らかにした（表3）。また、国内の研究においても、ジェネラティヴィティの状態と抑うつ性などの精神的健康面の関連性を示す結果が、いくつか報告されている（串崎, 2005a；丸島・有光, 2007）。

すなわち、ジェネラティヴィティが未完成な状態は、停滞感と結びついて精神病理に陥ってしまうとErikson（1950 仁科訳 1977）が指摘したとおり、ジェネラティヴィティの豊かさが欠けた中年期の発達的停滞状態は、精神的な健康面の危機リスクを高める可能性が示唆されたのである。

救済の連鎖と転落の連鎖のもの語り

McAdams, Diamond, Aubin, & Mansfield（1997）は、ジェネラティヴィティをより詳細に分析するために、ライフストーリー調査を実施した。Mansfield & McAdams（1996）と同様に、教職者またはボランティア活動へ参加しているか否かによって、ジェネラティヴィティの高群と低群の2群に振り分けた。この調査結果から、ジェネラティヴィティの高群は、低群よりも過去のライフストーリーを編集しなおして語る傾向があり、再編集したストーリーには、おおむね5つのエピソードが含まれていることが示された。McAdams et al.（1997）は、これら5つのうち、悪い出来事からポジティブな成果を導いた経験を語るエピソードに着目して、これを「救済の連鎖（redemption sequence）」と名づけ、人生を振り返るときのもっとも重要なエピソードと主張した。他方で、良い出来事からネガティブな結果を招いたエピソードを「転落の連鎖（contamination sequence）」と呼び、ジェネラティヴィティの高い人は、転落の連鎖を基礎に人生を振り返ることがきわめて少なかったと説明した。

そこで、McAdams, Reynolds, Lewis, Pattern, & Bowman（2001）は、これら救済と転落の連鎖のもの語りが、神経性傾向と心理的well-beingに影響していると仮説を立て、救済と転落の連鎖を語る頻度を得点化して、それらの関連性の評価を試みた。その結果、救済の連鎖のもの語りは、「人生への満足（life satisfaction）」「自尊感情（self-esteem）」「斉一性（coherence）」に正の相関がみられ、「抑うつ性（depression）」に負の相関がみられた。その後のCox, Hanek, & Cassario（2019）の研究によれば、中年期の救済の連鎖のもの語りが与えた神経性傾向とwell-beingへの影響は、その語りから4年経過したあとも継続しつづけるとされた。つまり、救済の連鎖を基礎とした内省によって、中年期の危機を乗り越えられた経験をもつ人は、その後の継続した幸福感の高まりとともに、中年期以降の人生にも肯定的な道筋がつけられると推察できる。

McAdamsらを系譜とした研究への反証

串崎（2005a）は、McAdams & Aubin（1992）の尺度が、次世代の育成と生産性に関するものに偏っており項目数が未充足であること、「停滞・自己陶酔」といった否定的特性も尺度に含

まれるべきであること、これら2点を指摘したうえで、独自尺度の作成を試みた。また、その尺度を用いて、アイデンティティの状態と、年代や性別などの属性、子どもの有無、社会的活動の有無などとの関係を検討するとともに、精神的健康面などとの関連からも、ジェネラティヴィティを検討した。その結果、串崎（2005a）は、自らの尺度の信頼性と妥当性が確認されたことを報告したうえで、ジェネラティヴィティの構成要素には「見返りを求めない献身的な態度（脱自己本位的態度）」が含まれていることを新たに見出した。また、男性はジェネラティヴィティに積極的な関心をもつ一方で、権威的あるいは自己本位的になりやすいこと、女性は他者に献身的でありながら、ジェネラティヴィティへの能動的なかかわりが少ないことなど、性別による違いを明らかにした。さらに、子どもをもつ女性は、もたない女性よりも世代継承的な感覚が強いことを報告した。とりわけジェネラティヴィティに停滞感が強い場合には、アイデンティティ危機や抑うつ状態に陥っている可能性を指摘した。このように、串崎の検討（2005a）は、McAdams & Aubin（1992）と異なるアプローチをとることで、これまで発見できていなかった構成要素を見出せたことに加えて、ジェネラティヴィティの様態と精神的な健康への影響が個人の特性によって異なることを明らかにした。これらのことから、McAdams & Aubin（1992）の系譜がジェネラティヴィティを検討する唯一無二の方法論ではなく、さらなる探究の余地が残されていると考えられる。

さらに、串崎（2005b）は、ジェネラティヴィティ感覚の高い人がどのように人生を振り返り、どのように将来を展望しているかを検討した。その結果から、ジェネラティヴィティが高い人は、自己達成だけに注力するのではなく、家族以外の他者や社会に貢献することに関心をもち、それらを糧に自己成長する強い動機づけをもっていることを報告した。その反面、ジェネラティヴィティが低い人は、エネルギーを注ぐ対象が個人的な領域に限定され、自己成長への実感にも乏しい傾向にあることを明らかにした。これらのことから、仮に「自己達成へ注力」と主体的作用性（Kotre, 1984）の言葉に重ねあわせ、「より広い他者や社会への貢献」を共同的関係性（Kotre, 1984）であると捉えるならば、串崎の示唆（2005a, 2005b）は、Kotre（1984）が再定義した概念と共通性があり、いわばKotre（1984）の系譜からの理論に重なりあうものといえよう。

以上のとおり、KotreやMcAdamsらの先駆者によって、概念的であったジェネラティヴィティに対して整合性のある理論モデルが与えられるとともに、ジェネラティヴィティの高まりとアイデンティティ統合への語りの作用が提示された。特に「創造性」「世話」「世代継承性」への関心と行動がジェネラティヴィティの様態に影響を与えることや、精神的健康および心理的well-beingとの関連が明らかにされてきた。また、国内においても、文化の違いから独自の尺度開発が必要であったが、おおむね海外の研究と同様の成果が得られているといえる。しかし、串崎（2005a）の研究から示唆されたように、ジェネラティヴィティの様態や構成要素、精神的健康との関係などは、まだ十分に明らかになったとはいえず、さらなる探究が必要といえよう。

2. 4　総合的考察

本研究では、Eriksonが中年期の発達課題としたジェネラティヴィティに着目して、アイデンティティの再体制化にかかわる先行研究をレビューし考察した。青年期に獲得したアイデンティティは、中年期における心理社会的な変化の経験が機会となって、再び危機をむかえる。このと

きに、危機や葛藤を主体的に受け止めて自己に意味づけること、および広く社会へとかかわり、行動することが、アイデンティティ再体制化プロセスの漸進に影響していた。これらの主体的な自己投入、とりわけ他者や社会との関係と行動は、中年期の危機を乗り越え、危機を好機へと変化させるための重要な要素と考えられる。また、この要素に深く関係するジェネラティヴィティは、内的に、また文化・社会的にも動機づけられて、関心をもち思慮を深め、行動と言動にあらわれてくると考えられる。そして、その経験の筋書きを肯定的に意味づけ、内省し、もの語ることで新たなアイデンティティに統合していくと推察される。これらを模式化すると、図３のように示すことができる。

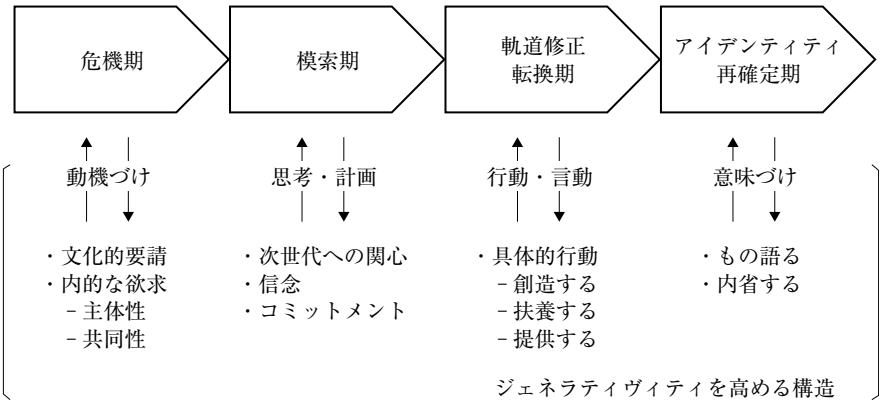


図３　アイデンティティ再体制化とジェネラティヴィティとの関係（筆者作成）

とりわけジェネラティヴィティが豊かな人は、危機に陥った苦い経験をポジティブに捉え直してもの語る。つまり、危機的な体験を救済の連鎖として内省し、肯定的に自己に意味づけることで、日常的にレジリエントな力を育んでいると考えられる。救済の連鎖のもの語りが、神経性傾向と心理的 well-being にも関連するという指摘は、中年期の心理的な支援の方法論を検討する上で、有用な示唆となるだろう。

国内においても、ジェネラティヴィティに着目して、成人期以降のアイデンティティを捉えようとする研究が活発におこなわれている。例を挙げれば、不妊治療（安田・やまだ，2008）や子育て・巣立ちからの中年期女性のジェネラティヴィティ（吉田・山下・若本，2018; 徳田，2004; 榎本，2005）、中年企業人の他者親密性と世代継承性との関係（笠井，2008）、職業専門家におけるアイデンティティの生成と次世代への継承性（岡本，2014）などから、ジェネラティヴィティの様態が示されてきた。また、McAdams らの理論を下敷きとした日本版の尺度が開発されるとともに、国内においても、精神的健康および心理的 well-being との関連性が明らかとなった。

本論文で見てきた中年期の発達研究は、一人ひとりの異なるアイデンティティを取り扱うだけでなく、その人の過去から未来にかけての時間軸が検討対象となり、テーマは対人関係を越えて、文化・社会への創造、世話、世代継承までと、広濶なものであった。そのため、ジェネラ

ティヴィティの豊かさによってアイデンティティを統合していくストーリーを、人生の物語として捉えなおす理論的視座、すなわち、ナラティヴ・アプローチの有用性を活かした中年期の発達研究が、国内においてもより一層発展することが望まれる。

3. 総　括

本研究では、中年期が危機の時期である一方で、危機がむしろ転機となって人生を好転させる「一皮むけた経験」と捉えることができた。そしてこの転機には、アイデンティティの再体制化の過程を経ること、そして自己を取りまく他者や社会との関係性を自己に意味づけ、かかわり、行動するという、Erikson の 7 番目の発達課題であるジェネラティヴィティを豊かにすることが手がかりとなり、そのエピソード、とりわけ救済の連鎖をもの語ることが足がかりになると推察された。

中年期の救済の連鎖のもの語りが、ジェネラティヴィティの発達に影響するだけではなく、心理的 well-being に相関があり、数年間にわたって影響していること（McAdams et al., 1997; McAdams et al., 2001; Cox et al., 2019）は、中年期の危機にある人へのこころの支援の基礎的知見となるであろう。実際に、米国の臨床心理学的な実践の場においては、このようなライフストーリーを用いたナラティヴ・アプローチが積極的に活用されているという（やまだ，2006）。しかしながら、国内に目を注げば、ジェネラティヴィティと抑うつ性などの精神的健康との関係が示されていながらも（串崎，2005a，2005b; 丸島・有光，2007）、ナラティヴ・アプローチを中年期の危機へのカウンセリングに応用した臨床的な研究は、五十嵐・高木・楡木（2005）の事例研究以外は見当たらない。McAdams（2006）は、ジェネラティヴィティは、人類にとって全体的、普遍的なものと位置づけている一方で、アメリカと異なる文化をもつ人びとは、異なるもの語りを生成すると指摘しており、救済（redemption）の概念は、アメリカ人の特異性、あるいは西洋文化に依拠している可能性が否定できない。すなわち、救済の連鎖を国内のこころの支援への介入に応用するには、有用性に疑問が残る。もうひとつは、心理的 well-being が高まったとしても、アイデンティティが再確立していなければ、不安や抑うつ傾向は再び現れることは少なくないだろう。しかしながら、救済の連鎖の語りから神経性傾向の抑制が 4 年間つづくという結果（Cox et al., 2019）とは整合性が保てていない。つまりイデンティティ再体制化と救済の連鎖の直接的な関係性においては、議論の余地が残されているといえる。

わが国においても、ジェネラティヴィティに着目した臨床的、実践的研究がよりいっそう活発になされてゆけば、McAdams らが示した「救済の連鎖」に値する日本の文化に即した語りのエピソードが見出される可能性が期待される。さらに、そのエピソードと精神的健康や心理的 well-being の関連が明らかになれば、日本の臨床現場における心理的な介入方法の拡充や、中年期の危機を好機と捉えたキャリア支援への活用が望まれる。そのためには、見出されたエピソードのもの語りが、アイデンティティ再体制化のプロセスに直接的に作用するというアウトカムを併せて検証することが肝要であると考えられる。

謝辞

本稿は、武蔵野大学大学院に提出した 2018 年度特定課題研究演習論文に、一部加筆修正したものである。本稿作成にあたり、ご指導とご高閲賜った武蔵野大学大学院・矢澤美香子先生に深く感謝いたします。

引用文献

Bridges, W.（2014）. TRANSITION 2ND ED. by William Bridges, Ph.D.（ブリッジズ，W. 倉光修・小林哲郎訳（2014）. トランジション　人生の転機を活かすために　パンローリング）

Cox, K.S., Wilt, J., Olson, B., McAdams, D.P.（2010）. Generativity, the Big Five, and Psychosocial Adaptation in Midlife Adults, Journal of Personality, Vol.78, No.4, 1185–1208

Cox, K.S., Hanek, J. K, Cassario, L.A.（2019）. Redemption in a single low point story longitudinally predicts well-being: The incremental validity of life story element, Journal of Personality, Vol.87, No.5, 1009–1024

榎本博明（2005）. 人生半ばの移行期におけるアイデンティティをめぐる問い　日本健康心理学会大会発表論文集　第 18 回，p.58

Erikson, E.H.（1980）. Identity and the Life Cycle （エリクソン，E.H. 西平直・中島由恵訳（2015）. アイデンティティとライフサイクル　誠信書房）

Erikson, E.H., Erikson, J.M.（1997）. THE LIFE CYCLE COMPLETED A Review Expanded Edition（エリクソン，E.H.・エリクソン J.M.，　杉村孝雄・近藤邦夫訳（2001）. ライフサイクル、その完結〈増補版〉みすず書房）

五十嵐豊子・高木喜一・楡木満生（2005）、中年期のうつ的症状に対して外在化を試みた事例　産業カウンセリング研究　Vol.7, No.2, 24–31

Jung, C.G.（1946）. Lebenswende Seelenproblem der Gegenwart（ユング，C.G. 鎌田輝男訳（1979）. 人生の転換期　総特集ユング　現代思想〈臨時増刊〉 青土社）

Jung, C.G.（1948）. Über die Psychologie des Unbewußten,（ユング，C.G. 高橋義孝訳（1980）. 無意識の心理　人文書院）

金井壽宏（2003）. 生涯キャリア発達を通じてのリーダーシップ開発とリーダーシップの瞬間──瞬間と生涯を媒介する経験の集積の意味合い　国民経済雑誌，188（2），53–78

笠井恵美（2008）. 企業における親密な対人関係とミドル期の世代継承性との関連性　Works Review Vol.3, 60–73

Kotre, J.（1984）. Outliving the self: Generativity and the interpretation of lives. Maltimore, MD: Johns Hopkins University Press.

厚生労働省（2019）. 平成 30 年中における自殺の状況
https://www.mhlw.go.jp/content/H30kakutei-01.pdf（2019 年 9 月 20 日）

厚生労働省（2019）. 平成 29 年（2017）患者調査の概況
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/dl/kanja.pdf（2019 年 9 月 20 日）

Kroger, J., & Green, K.E.（1996）. Event associated with identity status change. Journal of adolescence, 19, 477–490

串崎幸代（2005a）. E.H.Erikson のジェネラティヴィティに関する基礎的研究　──多面的なジェネラティヴィティ尺度の開発を通して　心理臨床学研究，Vol.23, No.2, 197–208

串崎幸代（2005b）. ジェネラティヴィティの感覚と人生に対する態度と関連について　心理臨床学研究，Vol.23, No.5, 591–596

Levinson, D.（1980）. The Seasons of a Man's Life.（南博訳（1980）. 人生の四季──中年をいかに生きるか. 講談社）

Mansfield, E.D., McAdams, D.P.（1996）. Generativity and themes of agency and communion in adult autobiography. Personality and Social Psychology Bulletin, 22（7）, 721-731.

Marcia, J.E.（1966）. Development and validation of ego-identity status. Journal of Personality & Social Psychology, 3, 551-558

Marcia, J.E.（2002）. Identity and Psychosocial Development in Adulthood. IDENTITY:AN INTERNATIONAL JOURNAL OF THEORY AND RESEARCH, 2（1）, 7-28

丸島令子（2005）. 世代性尺度の作成 ―世代性の関心と行動モデルの測定 心理臨床学研究、Vol.23, No.4, 422-433

丸島令子・有光興記（2007）. 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討 心理学研究, Vol.78, No.3, 303-309

松尾洋平・渡辺三枝子（2007）. 現代の中年職業人が抱く不安感と心理的危機 経営行動科学, Vol.20 No.2, 155-168

McAdams, D.P.（1985）. Power, intimacy, and the life story: Personological inquiries into identity. New York, NY: Guilford Press.

McAdams, D.P., Aubin, Ed de St.（1992）. A Theory of Generativity and Its Assessment Through Self-Report, Behavioral Acts, and Narrative Themes in Auto biography. Journal of Personality and Social Psychology, Vol.62, No.6, 1003-1015

McAdams, D.P., Aubin, Ed de St., Logan, R.L.（1993）. Generativity among Young, Midlife, and Older Adults. Psychology and Aging, Vol.8, No.2, 221-230

McAdams, D.P., Diamond, A., Aubin, Ed de St., Mansfield, E.（1997）. Stories of Commitment: The Psychosocial Construction of Generative Lives, Journal of Personality and social Psychology, 1997, Vol.72, No.3, 678-694

McAdams, D.P., Reynolds, J., Lewis, M., Pattern, H.A., Bowman, P.J.（2001）. When Bad Things Turn Good and Things Turn Bad: Sequence of Redemption and Contamination in Life Narrative and Their Relation to Psychosocial Adaptation in Midlife Adult and in Students, Personality and Social Psychology Bulletin, Vol.27, No.4, 474-485

McAdams, D.P.（2006）. The Redemptive Self: Generativity and Stories Americans Live By, Research in Human Development, Vol. 3（2 & 3）, 81-100

宮城まり子（2015）. キャリアカウンセリング 駿河台出版社

室松慶子（2015）.「人生の正午」前後の女性のトランジション ―転機, 危機, 仕事のやり方を大きく変えた経験とキャリアの３サイクル― 現代社会研究, 13（2015）, 55-64.

中西信男（1989）. 渡部貴美子・木原和子・渡部雅之・佐方哲彦・古市祐一・三川俊樹・水野正憲・藤田綾子（編） 人間形成の心理学―ライフサイクルを究明する―ナカニシヤ出版

中西信男・佐方哲彦（1993）. EPSI 上里一郎（編） 心理アセスメントハンドブック pp.419-431

永田彰子・岡本祐子（2005）. 重要な他者との関係を通して構築される関係性発達の検討 教育心理学研究, Vol.53, 331-343

永田彰子・岡本祐子（2008）. 重要な他者との関係を通して構築される関係性発達の特徴―信頼感およびアイデンティティとの関連― 教育心理学研究, Vol.56, 145-159

岡本祐子（1985）. 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, Vol.33, No.4, 295-306

岡本祐子（1986）. 成人期における自我同一性ステイタスの発達経路の分析 教育心理学研究, Vo.34, No.4, 352-358

岡本祐子（1994）. 生涯発達心理学の動向と展望―成人発達研究を中心に― 教育心理学研究, Vol.33, 132-143

岡本祐子（2014）. 世代継承シリーズ１ プロフェッションの生成と世代継承 ケーススタディ 中年期の実りと次世代育成 ナカニシヤ出版

岡本祐子（2006）. 心理力動論から見た中年期危機への援助 岡本祐子（編） 現代のエスプリ 別冊 中年の光と影 ―うつを生きる（pp.238-248） 至文堂

奥田紗史美・高野恵代（2018）．世代継承性に関する臨床的研究　岡本祐子・上手由香・高野恵代（編）世代継承シリーズ３　世代継承性の研究の展望　──アイデンティティから世代継承性へ（pp.327-381）ナカニシヤ出版
小此木啓吾（1983）．中年期の危機　精神の科学６（pp.211-254）　岩波講座
佐方哲彦・中西信男（1987）．成人期の同一性の発達に関する研究（一）── EPSI による発達課題の達成意識の変化の検討　日本心理学会第 51 回大会発表論文集，549
清水紀子（2008）．中年期のアイデンティティ発達研究：アイデンティティ・ステイタス研究の限界と今後の展望　発達心理学研究．Vol.19, No.3, 305-315
杉村和美（1998）．青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し　発達心理研究，Vol.9, No.1, 45-55
高橋祥友（2000）．中年期のこころの危機　日本放送出版協会
鑪幹八郎・岡本祐子・宮下一博（2002）．アイデンティティ研究の展望Ⅳ　ナカニシヤ出版
徳田治子（2004）．ナラティヴから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から　発達心理研究，Vol.15, No.1, 13-26
Waterman, A.S.（1982）．Identity development from adolescence to adulthood: An extension of theory and a review of research. Development Psychology, 18, 341-358
やまだようこ（2006）．質的心理学とナラティヴ研究の基礎概念──ナラティヴ・ターンと物語的自己──　心理学評論，Vol.49, No.3, 436-463
安田祐子・やまだようこ（2008）．不妊治療をやめるプロセスの語り──女性の生涯発達の観点から　パーソナリティ研究，Vol.16, No.3, 279-294
吉田ゆり・山下桂子・若本純子（2018）．子育てサポーター活動における子育て経験の活用──子育て経験を持つ中年期女性サポーターの語りから抽出された世代性の検討──　長崎大学教育学部紀要，Vol.4，263-276